オピニオン・解説

私論 公論

いのちをまもるパートナーズ

安全な医療へ 患者と協動

滋賀医科大付属病院講師　坂口　美佐

さかぐち・みさ　1965年生まれ。東京都出身。筑波大卒。九州大学大学院修了（医療経営・管理学専攻）。専門は医療安全管理、麻酔科。06年から現職。医療安全全国共同行動では技術支援部会委員。

ちょうど一年前、医療安全全国共同行動「いのちをまもるパートナーズ」が始まった。このキャンペーンは、全国の病院が自主的に参加登録を行い、地域の病院が互いに協力しながら医療の質・安全の向上をめざすものである。

医療行為は危険をはらむものであり、どんなに細心の注意を払っても予期しない合併症や思いがけない薬の副作用など、不幸な結果が起こりうる。医療行為に伴う何らかの傷害（有害事象）は、欧米の調査によると入院患者の3―16%、日本の調査では入院患者の6・8%に生じていることがわかった。

これらの有害事象をできるだけ減少させ、患者の生命を守るために、米国では「十万人の命を救え」キャンペーンが展開された。全米で約五千五百ある病院のうち三千百の病院が参加して改善に取り組んだ結果、入院中の死亡数を大幅に減らすことに成功したという。

日本においても、二〇〇八年五月から二年間をキャンペーン期間として、医療安全全国共同行動が実施されている。ホームページには歌手のリュ・シウォンさん、小林幸子さんなどからの応援メッセージも掲載されている。今月三十日には東京で医療安全全国フォーラムが開催される。

キャンペーンの行動目標は①危険薬の誤投与防止②周術期肺塞栓症の予防③危険手技の安全な実施④医療関連感染症の防止⑤医療機器の安全な操作と管理⑥急変時の迅速対応⑦事例要因分析から改善へ⑧患者・市民の医療参加―の八つで構成されている。

「患者・市民の医療参加」では、「安全は名まえから」という取り組みが大きな柱となっている。これは、患者に名のってもらうことで取り違えを防こうという活動である。ごく単純なことではあるが、患者確認は医療を行う上でもっとも基本的なことである。どんなに高度な医療を提供しても誤った患者に実施すれば全く意味をなさないだけでなく、重大な結果をもたらしかねない。

患者取り違えの背景には複数の要因が考えられる。病院にはたくさんの患者名が登録されており、その中には同姓や似たような氏名が多数含まれ、同姓同名も少なくない。また、患者を確認する際、医療者が「〇〇さん」と呼びかけ患者が「ハイ」と返事をするという方法をとることが多いが、間違った名前を呼ばれても返事をしてしまうことがある。

患者取り違えを防ぐには、医療者が患者にフルネームをたずね、患者がフルネームをこたえて確認することが有用な方法である。このことを患者・医療者の双方が理解して「おなまえ確認」を積極的に行うことが、患者・市民の医療参加の初めの一歩となる。

また、患者が「お薬手帳」などを活用して自分の飲んでいる薬をよく知っておくことによって、薬の間違いに気付くこともある。患者からの疑問は安全のための大切な情報であり、あれ？と思ったら医療者にたずねることも医療参加の一つである。

「いのちをまもるパートナーズ」の名のとおり、患者と医療者の協動によって医療をより安全なものにしていくことが、このキャンペーンの願いである。

(c)京都新聞社